

凡作、駄作との出会い 植山俊宏

現職の高校教師と二人で和歌の学習会を続けて十三年目に入る。岩波の新大系本を用い、現代語訳を参考にしつつ読み進めることにした。まずは八代集である。一応読み終えたもののとても理解しきれず、再度最初から挑戦した。少し自信が芽生えたところで、避けてきた万葉集へと進んだ。短歌はそこそこ理解できた。

古典は名作だから理解する必要があるという固定観念は捨てた。分からない歌は分からないと割り切ることにした。主に意味ではなく、歌のどこがいいのかという価値観においてである。社会、風土が異なるが故の困難さが存在する。それを完璧に捉えようとすると研究的な作業が必要となるし、自分を同時代人へと置き換える多大な労苦を費やさなければならない。現代人の立場から古典に歩み寄った上で、理解が難しかたがないと割り切った。要は読み進めることに意義があるとした。

妙なことに気付いた。和歌はすべてが素晴らしいわけではないのである。勅撰集を中心に読みはじめたが、浅いのではないかと、単に歌人の思い込みだろうと思える歌にしばしば出会う。一方、人口に膾炙している歌の一定の価値も見えてきた。仕事柄、国語教科書の和歌にふれる機会が多いが、それらの作品はそれなりの妥当性がある。因みに教科書教材は、極めつけの秀歌選というわけではなく、一定のバランスで秀歌を集めている。生徒たちが

ら歓迎されない歌が入っているのも当然である。

さて和歌講読の学びだが、秀作に出合いたいとの思いで鑑賞していったが、逆に凡作とは何かというところに行き着いた。凡作、ときに駄作に出合う経験は、古典イコール名作のイメージを打ち破ってくれた。表裏一体の理である。勅撰集の次に私家集に移ったときにますますその思いが強くなった。

私家集は私家集としてのまとまりがあるし、おもしろみも感じられる。特に「伊勢集」には驚かされた。だが、歌の優劣でいうと、レベルの差が見て取れる。勅撰集から私家集へと進んだので、私家集の中の勅撰集入集歌の佳さが見えるのである。山の高さに喩えると、勅撰集はそれなりの高度を誇る。私家集の非入集歌はそこまでの高さはない。しかし、その高さからの眺めもなかなかのものであることが多い。親近感という側面といえようか。

柳瀬睦男氏によると、菜根譚に読書とは底の抜けた樽に水を注ぎ込むことだという一節があるという。それを繰り返したあげく、樽の壁に生える苔のようなものが読書の神髄だと。古歌との出会いもそのようなものかもしれない。何千、何万と出合って、残ったものが秀作という捉え方である。学びの一つの側面として、深入りではなく、くり返しということもいえるのではないか。一年間、時評を仰せつかった。個人的な関心が中心になると思われるが、力を注いでいく所存である。お付き合い願いたい。